FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

1999.9.30
No.36

越前赤瓦（武生市浄秀寺所用）

館長就任にあたり

平井　聖

福井県立博物館は、大きな転期を迎えようとしています。来年、勝山に恐竜を中心とした博物館がオープンすることは、県民の皆様にはよく御存知の事と思います。この新しい博物館は、これまで福井県立博物館の一分野を占めていた古生物関係の部門が、発展的に分離独立して出来るのです。その結果、福井県立博物館は、自然系分野を分離して、人文系の歴史博物館に衣がえすることになりました。

私は、この春から館員の皆さんと一緒に、この仕事をするようにということで、4月に着任しました。

昨年度1年間、福井県立の博物館・資料館などのあり方を検討する委員会に参画していましたので、県立博物館を歴史博物館としてリニューアルすることに対する基本理念や、新しい展示内容に関する学芸員の皆さんの考え方はよく理解しているつもりでした。

しかし、半年経ち、その間に館に助言下さる方々の御意見を聞き、また館が行なっている講座等の様子を見て、もっと根本的な所に考えなければならないことがあることが、見えて来たのです。

そんな事当然ではないか、今頃何を言っているのか、何も考えないで引受けたのかとおしかりを受けることは覚悟の上で申しますが、新しい歴史博物館が、どのように社会にお役に立つかと言うことです。近い所では県民の皆さん、更に広く福井に関心をもって下さる方々のお役に立つかと言うことです。

博物館の展示は普通は館外にもって出るということはありませんから、見に来ていただかなければなりません。私は、このお話をいただく前から、博物館には館外に人工衛星ほどのミニ・ミュージアムをつくる必要があるという考えをもっていました。小学校や中学・高校のあき教室を利用して、先生方と協力して地域にかかわるミニ・ミュージアムを開くのです。児童・生徒に見てもらうだけでなく、地域の方々にも見ていただこうという考えです。もっと知りたいという方々は、歴史博物館に来ていただくということになります。この考えは、現実には県と市町村の間の壁などがあって、実現には沢山の山を越えなければなりません。

そこで、もっと早く実現できそうなことを考えてみました。学校の先生方と一緒になって、郷土についての学習の場を提供するのです。一方的に展示を順番に見ていただくのではなく、目的やカリキュラムに応じた見方を工夫するのです。先生方に博物館で実物を見ながら授業をしていただく、先生の苦手な単元で館員に適任者がいれば、先生とよく打合せた上で、代って説明をすることを考えてもいいでしょう。

余裕の時間が出来たのは、児童・生徒だけではありませんが、先ずは若いうちに博物館に親しんでもらえるよう、博物館側が自ら努力しなければなりません。すぐ役に立たないものは必要がないという時代です。博物館も例外ではありません。現実に、目に見える状況で役に立つ工夫をして行きたいと思っています。どなたでも御要望をお寄せいただければ幸いです。

ご期待ください！

特別展

「モノから学ぶ～博物館のおもしろ実験展～」

2000年2月5日(土)～3月12日(日)

この特別展では、モノから歴史を解明する意味とその楽しさを紹介します。さまざまな調査や研究作業を通して、モノが伝える歴史的な情報を引き出す過程、その成果を披露します。

通常、みなさんが博物館で目にするのは、形になり、わかりやすい解説が付いた資料（モノ）です。そのモノが見つかってから、みなさんの前に展示資料として現れるまでには、いくつもの作業やさまざまな分析・研究が行われています。

そうしたモノの発見から展示までの過程を、大きく2つのコーナーにわけてわかりやすく紹介します。博物館の展示企画として、じつに新しい試みです。

モノを集める、発見する

博物館がこれまでに調査・収集した資料のなかから、量的にまとまったコレクションのいくつかを展示します。またここでは、収集・発見した当初の資料の状態もおみせします。

おもな展示品

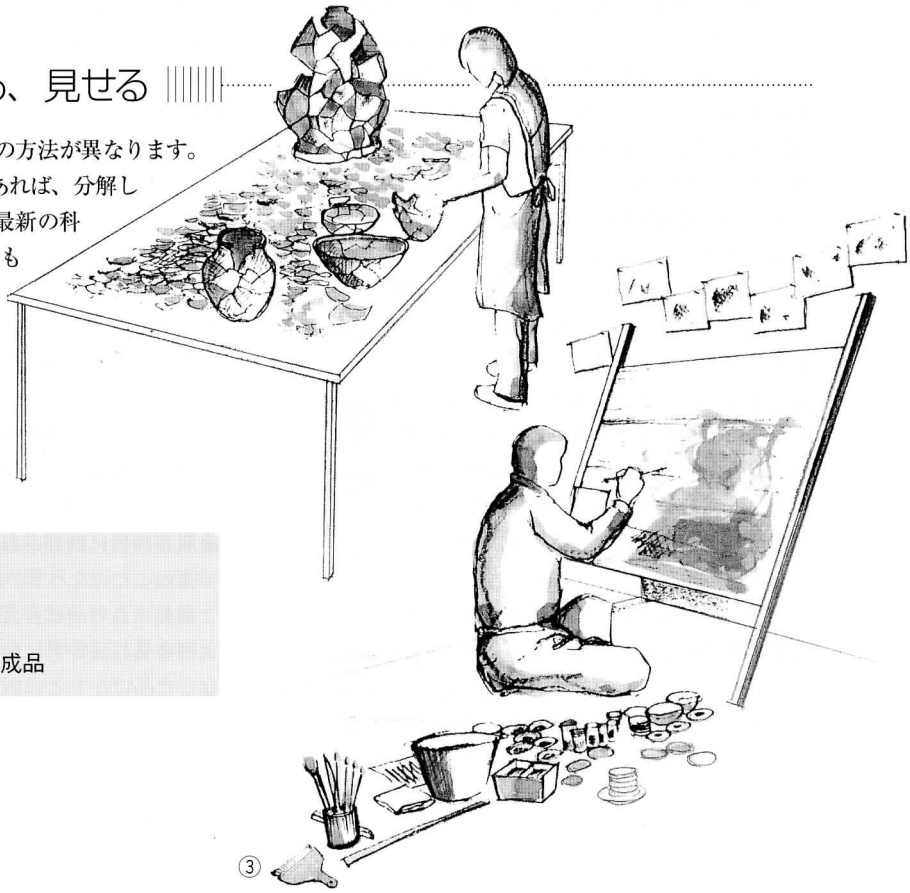
- 看　板
- 引　札
- 瓦・こけら板
- 土人形
- 埋蔵文化財の発掘現場

モノを復元する、見せる

モノは性質によって、研究・分析の方法が異なります。破片を組み立てて調べるモノもあれば、分解して調べるモノもあります。また最新の科学技術を用いて分析を行う場合もあります。ここでは、モノの中に隠されていた情報を引き出す過程をビジュアルにおみせすると同時に、多くの成果（復元完成品）を披露します。

おもな展示品

- 土器・陶器の接合・完成品
- 古代の武具の復元・完成品
- 江戸時代の絵馬の復元・完成品



碧玉製の合子

中司 照世

1

当館の古代の展示品の中には、古墳時代の遺物である石製の合子（盒）1個が陳列されている。やや残念なことは、どの遺跡から出土したのかがわからない、由来が不詳の品である。また、合子は、本来蓋と身の二つの部分からなるものであるが、当館の品では蓋は新たに樹脂で復原したものであって、本物は身（図1、写真1）だけである。そうした点では、学術的な価値に多少欠ける面がないとはいいがたい。ともあれ、畿内などの前期古墳からごくまれに出土する、まことに貴重な品である。

2

合子は、暗緑色で硬質の碧玉という石を用いて製作した小型品である。身の形状は体部と脚部とからなる。体部は低い円筒形をなし、底面には四個の脚部をもつ。体部上端は、呑み口状になるようにごく低い口縁端部が突出し、その直下には蓋受けの細い凸帯がめぐる。この凸帯には、円周を二分する形で対称的な位置に小孔一対がある。また、体下端部にも外側面が匙面をなす凸帯がめぐる。外底面の中央部は円形をなし、外縁部に沿って平面が長方形の四脚がある。一方、内部は、体部外形の円柱形に合わせた形に、やはり低い円柱形を呈する。最大径5.1㎝、高さ2.2㎝、内径3.8㎝、深さ1.4㎝、容量15.9㎤を測る。

この合子で注目すべき点は、脚部は四脚とも下底面が体部外底面より上位に位置していることである。つまり、合子の最下端部は脚部下底面ではなく体部外底面であって、四脚は脚部としての機能を果たしていない。また、小孔は、蓋と身とを緊縛する細い紐を通すためのもので、体部に一対で直接穿たれている品が多いが、本例のように凸帯に穿たれているのは珍しい（ただ、同様に珍しい例で、同型式だが小孔をもたない品もある）。

次に、製作技法について述べると、外面は丁寧に研磨仕上げされている。しかし、底面には小さな敲打痕が消え残っている。さらに、長方形をなす四脚の体部への接合部には脚に外接する形で鋸痕である沈線が残る。つまり、まず碧玉塊を適当な大きさに割って、次に敲打により合子の外形に近い円柱状に形を整え、さらに研磨して整良な円柱形に仕上げた後、下部に相当する一方の端面の外周部に鋸で四脚を切り込む形で割り付けて、脚部以外に相当する他の部分を敲打や研磨で斜めに削り取って成形している。一方、内部は、穿孔によって跨り抜いたものと推定される。

なお、こうしたいわゆる碧玉製合子は、石材からみてその多くが律令期の国域である越前・加賀の両地方で製作されたものと考えられる。事実、この時期の玉作り遺跡である石川県成山遺跡では、合子の未完成品にまずまちがいないと思える品（図2-5）が出土している。

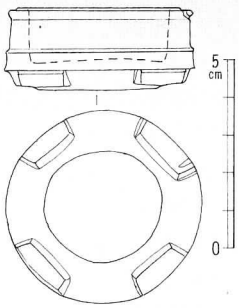
3

冒頭にも記したが、いわゆる碧玉製合子は、わが国でも類例の少ない副葬品である。西谷真治氏の研究によれば、昭和45年に40個余りの出土例が報告されている。その後の古墳（一部は集落遺跡）の調査による若干の新発見例があるが、それらを追加しても管見の限り60個余りの出土例を数えるに過ぎない。

西谷氏の石製合子の分類によれば、当館の品は前述のように平面形が円形で、外底面に四脚を、口縁部に紐孔をそれぞれ有するので、「碧玉製円形有脚有孔盒」と呼ばれる型式に属している。そして、脚をもつ合子の中でも最も小型品であって、最古の型式（Ja1）にあたる。

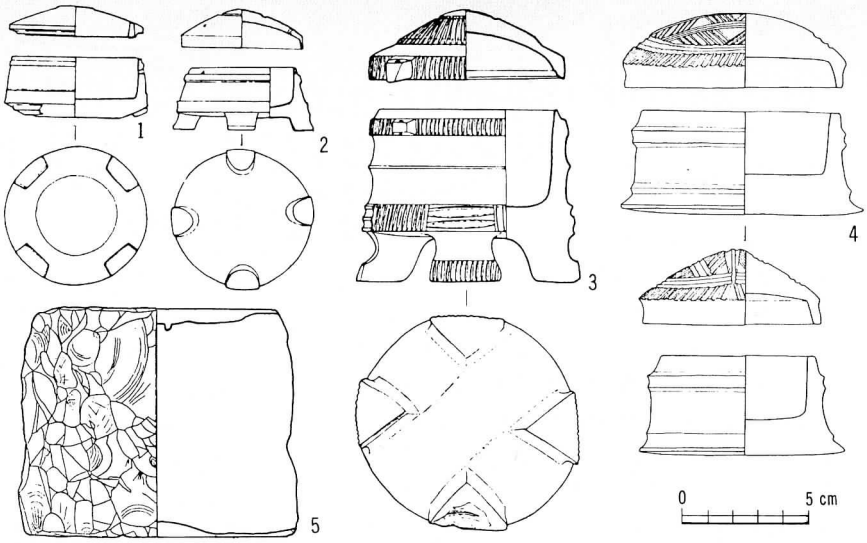
この型式の碧玉製合子は、近畿の大和・山城・摂津・但馬の各地方や東海の美濃・尾張両地方という、ごく一部の主要古墳からのみ発掘されている。出土古墳は、畿内の首長墳や、畿内から山陽道・山陰道・東山道などを経てより外域に至る箇所を扼する要衝地域の首長墳にあたる。つまり、これらの合子は、倭（ヤマト）王権によって、畿内中枢部や畿内に外接する政治的な要衝部の主要豪族にのみ配布された品であると思える。したがって、当館の品は、こうした地方のいずれかの前期首長墳に副葬されていた品である可能性がきわめて強いことになろう。

なお、この品は身だけであるが、他の遺跡からの出土例を見れば必ずしも全ての例が蓋と身とで1セットになった品ばかりとは限らず、蓋を欠き身だけの場合も散見される。たとえば、京都府飯岡車塚古墳や兵庫県城の山古墳の出土品は身だけである。とりわけ、城の



【図1】県立博物館所蔵の碧玉製合子実測図（縮尺1/2）

【写真1】県立博物館所蔵の碧玉製合子



【図2】各地出土の碧玉製合子（縮尺1/3）　1.大阪府弁天山C1号墳　2.奈良県富雄丸山古墳　3.岐阜県坂尻1号墳　4.岐阜県親ヶ谷古墳　5.石川県成山遺跡

山古墳はなんら乱掘を被ってはいなかった。ならば、仮りに本例が乱掘による出土品であったとしても、埋葬当時から蓋を欠き、身だけの副葬であった可能性も少なくない。

参考までに、本例に最も近似する品は、大阪府弁天山C1号墳の出土品（図2-1）である。おおかたの形状のみならず、四脚の平面形が長方形を呈することや、脚端部の下底面が体部下底面より上位に位置していて、四脚が脚部としての機能を果たしていないことなど、共通点が少くない。双方の品が共に同じ工房で製作された可能性さえある。

4

以上、展示品の碧玉製合子について説明した。ところで、碧玉製合子については模造品説が提起されているにもかかわらず、なんのために製作された品か定説がない。その大きさが、明確に使用には不適当なほどの小型品が見あたらないにもかかわらず、内容物の遺存例がほとんどないことも、模造品説の当否の確定を困難にしている。ただし、唯一の例で、かつ、通有の品よりきわめて大きい大型土製合子という点が異例であるが、岡山県金蔵山古墳では農工具や魚具が納められていたという事実がある。

それでも、西谷氏も賛同するとおり、石製合子は本来木で作った合子を石（土製の場合は土）に写したものであろう。ちなみに、同種の器物である石製高坏（奈良県伝日葉酢媛陵古墳例）は、同様な形状の木製高坏（滋賀県入江内湖遺跡例）が、石製脚付盤（岐阜県親ヶ谷古墳例等）は、やはり同様な形状の木製脚付盤（奈良県平城宮跡例等）がそれぞれ近年発掘され、本来木器が祖形であることが明らかになった。

石製品の多くはやがて碧玉から滑石に材質が変化するが、対象を滑石製にまで広げるとその種類は鏡・玉・釧から壷・槽や剣・鏃・甲・楯・刀子・椅子など多種に及んでいる。そして、これらはいずれも葬祭具というべき模造品である。

すなわち、碧玉製合子もそうした品の一種として、倭（ヤマト）王権の中枢を構成するごく一部の主要豪族間でのみ、しかも石製品としては早い段階に、限定・使用されたものであろう。

主要参考文献

加賀市教育委員会『加賀片山津玉造遺跡の研究』1963年。

西谷真治「古墳出土の盒」（『考古学雑誌』第55巻第4号、1970年）。なお、個別の合子の出典は記載を省略。

宮内庁書陵部「日葉酢媛御陵の資料について」（『宮内庁書陵部紀要』第19号、1967年）。

奈良国立文化財研究所『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1986年。

米原町教育委員会『入江内湖遺跡（行司町地区）発掘調査報告書』1988年。

東海古墳文化研究会「岐阜県西濃地方の前方後方（円）墳の測量調査」（『古代』第86号、1988年）。

武生市浄秀寺の 越前赤瓦

中原 義史

近世後期の越前で生産されていた瓦は赤紫色をしており、越前赤瓦の名で呼ばれています。かつては大きな寺社や民家などにこの瓦が葺かれており、敦賀以北の各地でその姿を見ることができました。しかし近年、建物の改築や取り壊しに伴い、姿を消す所が増えてきました。

今年の4月、武生市京町2丁目にある真宗大谷派浄秀寺で、本堂屋根の瓦葺き替え工事が行われました。ここには近世にさかのぼる越前赤瓦が非常に良く残っており、その赤紫色の屋根は街の景観にとってアクセントの一つとなっていました。博物館では、以前から越前赤瓦の調査研究を行っており、この貴重な機会に、住職・檀家総代・工事関係者のご協力を得て、工事に立ち会わせていただきました。また、使用していた越前赤瓦のうち500点あまりを博物館に寄贈していただきました。

本堂は真宗寺院の通例のとおり、東に向いて建っており、屋根は入母屋造りでした。屋根の正面は隅棟と向拝の一部を除いてほとんどが赤瓦、背面は増築部分を除くほとんどが赤瓦でした。隅棟や向拝の一部は傷みがひどかったため、昭和50年（1975）に新しい瓦で葺き直したものです。また、背面の増築は、大正5年（1916）に行われたもので、ここに葺いていた瓦も当時のものと考えられます。

本堂正面の向かって右側の隅棟の獅子口には、「于時寛政六甲寅春」「池上瓦屋一」の銘文が、左側の隅棟の獅子口には「于時寛政六甲寅三月上旬」「池上瓦屋三」の銘文が刻まれていました（表紙写真の奥の大型の瓦は本堂背面に使用されていた無銘の獅子口）。獅子口の色調や焼成の具合は、他の赤紫色の瓦群と全く同じで、これらはすべて寛政6年（1794）に葺かれたものと考えられます。また、その生産地も、当時の赤瓦産地の一つで武生に最も近い池ノ上（武生市池ノ上町）であることが分かりました。なお、「池上瓦屋」に続く「一」や「三」の数字は、針金で留められた獅子口の「経の巻」にも刻まれていました。おそらく、別々に造られた獅子口本体と三つの「経の巻」を、後で組み合わせるための番号と考えられます。

軒先に葺かれていた軒桟瓦には、丸瓦部分に右巻きの三巴文が、平瓦部分に波をかたどったような文様が付

【写真1】同じ瓦笵で作られた軒桟瓦（中央の波状の文様が同じ）
上：浄秀寺　中：妙泰寺　下：春日神社

「安永三年浄秀寺」

【写真2】墨書きのあるこけら板

いていました。後者のような文様は、丹南地域の越前赤瓦に広く見ることができます。しかし、それ以外の地域では今のところ使用された例を見たことがなく、瓦の大まかな産地を知る良い指標になると思います。

今回、この瓦文様について新たな発見がありました。この瓦は、武生市池ノ上町の春日神社の瓦、それと南条町西大道の妙泰寺の瓦と同じ瓦笵（型）で作られたものであることが分かったのです。さらに、春日神社と妙泰寺のものの方が、瓦笵に傷が多く見られ、浄秀寺のものより新しいということも判明しました。なお、春日神社の瓦は、瓦の窯場だったと考えられる池ノ上町上ノ山地籍で採集されたものと同じ瓦笵で作られたことが既に知られていました。これによって、4ヵ所の瓦が同じ瓦笵によって結ばれることになりました。

なお、浄秀寺では、創建時のものと考えられる赤紫色の瓦には刻印が押されていませんでした。刻印があったのは、若干黒ずんでおり創建後に補充されたと考えられる瓦だけでした。越前赤瓦産地の一つである松岡でも、19世紀前半のある時期に、瓦に刻印を押すようになります。池ノ上でもこれと同じ事がいえるようです。

寺の過去帳によると、宝暦12年（1762）の府中大火によって本堂と庫裡が焼失し、その年の内に庫裡が再建されました。しかし、本堂の再建は遅れ、棟札が揚げられたのは安永4年（1775）のことです。焼失後13年にして、やっと本堂再建がかなった訳です。しかし、そうすると安永4年に建物が完成した後、寛政6年に瓦が葺かれるまで、屋根はどうなっていたのでしょうか。

その答えは瓦を外して分かりました。瓦を外し、瓦の針金を留めていた桟とその下に敷かれていた杉皮をはがすと、こけら葺きの屋根が出てきました。こけら葺きとは、短冊形をした木の薄板を重ね合わせて葺いた屋根のことです。浄秀寺本堂は、こけら葺きの建物として再建され、その19年後に瓦葺きになったということが分かりました。瓦葺きに変更するに際して、その重量に耐えるために屋根や建物本体にどの程度の補強がなされたのかについては、まだ調査を行っていません。

【写真3】屋根の部分名称（浄秀寺本堂）

なお、屋根の南側部分には、墨書きのあるこけら板がまとまって葺かれていました。「檜皮屋弥助」「浄界」「正（聖）徳太子殿」「浄秀寺」「安永三年」「三文 何かし」「大福帳」などさまざまなものがみられます。同じ字句を繰り返し書いたものがかなりあり、習い書きや落書きだと思われます。「檜皮屋弥助」は、こけら葺きを担当した職人の名前かもしれません。棟札には、「ひわた棟梁善光寺町小次兵衛」の名前が見えます。

18世紀末から19世紀にかけては、それまで城郭や少数の寺院にしか使われていなかった瓦が、ある程度の規模の寺社にも葺かれるようになった時期です。武生市若竹町にあった府中題目堂（現妙唱寺）では、寛政2年（1790）に庵室を立て替えるに際して、建物を長持ちさせるため、瓦葺きの建物にしたいという旨で奉加を募っています。瓦葺きには確かにこのような利点があったでしょうし、こけら葺きや檜皮葺きに比べて、屋根葺き替えの頻度も下がります。また、火災などの際に延焼を受けにくくなります。

しかし、これらの経済的な利点だけで、瓦葺きの普及がすべて説明できるのでしょうか。この時期の嶺北地域では、夢楽洞に代表される絵馬の奉納が流行し、また灯籠・狛犬などの石造物の奉納も盛んに行われていたようです。市場経済の発達とともに、経済的な余裕を持つ人びとの層が厚みを増し、その中で自分たちに関わる寺社を飾るという行為が、地域間の競争意識に後押しされながら流行するようになったのではないでしょうか。瓦葺きも、このような寺社を飾る行為の一つと思われます。ただし、絵馬や石造物の奉納は個人やごく少人数によって可能ですが、瓦葺きに必要とされる費用・資材は相当なものとなるため、檀・信徒全体の協力が無ければ実現しがたいという点が異なります。

今回の調査は、近世後期の社会を考える上で貴重なさまざまな情報を与えてくれました。一見、取るに足らないような瓦でも、そこには大きな価値が秘められているのです。越前赤瓦の調査研究は今後も継続していきますので、皆さまからの情報をお待ちしております。とくに屋根の葺き替えなどの際にはぜひご一報ください。

博物館 オリジナル・絵馬グッズの紹介

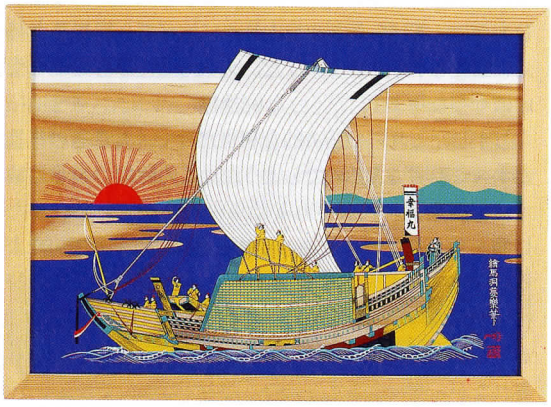
小絵馬

<シルクスクリーン>

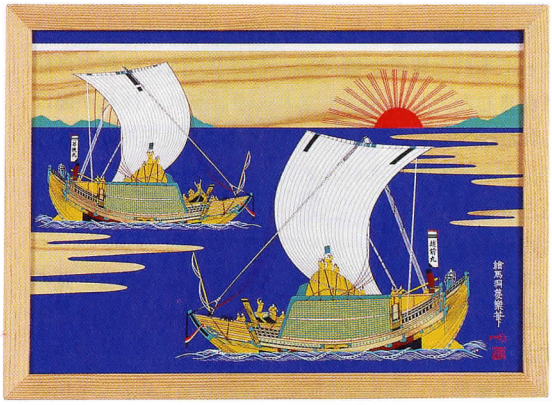
8種類（3号、6号各絵柄4種類）、いずれも限定300枚（ナンバー入り）

1 黒馬（3号）

2 白馬（3号）



3 船［幸福丸］（3号）



4 船［越前・若狭丸］（3号）

3号（A4）約23×32cm	各3,800円
6号（A3）約33×46cm	各18,000円

このほかに6種類の肉筆作品があります。内容は、次号に紹介いたします。

福井県立博物館友の会

ふくいミュージアム
No.36 1999.9.30発行

FUKUI PREFECTURAL MUSEUM

編集発行
福井県立博物館
〒910-0016 福井市大宮2丁目19-15
☎0776-22-4675(代)